

会員紹介：阿部直美さん

私の略歴



1984年新潟県立長岡高校卒。1988年専修大学文学部国文学科卒業後、新潟県立村松高校で国語科常勤講師を務めた後、1990年アメリカ・テネシー州に新しく設立された「ブラウントカウティ補習授業校」講師として渡米。補習校で国語や体育を教える傍ら地元の4年制リベラルアーツカレッジのMaryville Collegeで国際関係論を専攻しながら、スペイン語やパイプオルガン、アメリカ法概論など関心がある授業を取り、リベラルアーツの良さを満喫。補習校設立の中心となっていたデンソーの現地法人「Denso Manufacturing Tennessee」にリクルートされ、人事部で5年勤務。1999年アリゾナ州のThunderbird School of Global Managementに入学、マーケティングとアフリカ地域研究を中心に学ぶ。MBA修了後、MBA取得者を対象としたアメリカのプログラムMBA Enterprise Corpsに参加。USAIDが中央アジア5か国で実施するEnterprise Development Projectにビジネスアドバイザーとしてキルギスに派遣され、5か国でのビジネス教育に携わる。その後、JICAキルギス事務所に企画調査員として勤務した後、カザフスタン、モンゴルの「日本センタープロジェクト」にビジネスコース専門家、中小企業振興専門家として派遣される。2018年よりJICAタジキスタン事務所に企画調査員として勤務中。モンゴルを含めると2000年からこれまで20年間、中央アジアで勤務している。

従事した仕事の内容

田舎の高校からアメリカの補習校へ [1990～1995]

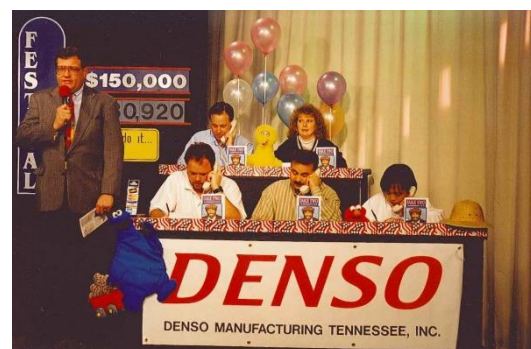
日本の高校で常勤講師を1年務めたあと、アメリカ・テネシー州に新設された補習授業校の教師として1990年にアメリカに渡った。補習授業校は、普段は現地校で勉強している子供たちが日本に帰国した際に日本の勉強や習慣にすぐ馴染めるようにとのことから土曜日や夏休みの集中講義などで教える学校である。親御さんによっては「英語ができることが第一、日本語の勉強は家庭でやれば十分」と考え、補習校をあまり重要に考えず、むしろ土曜日にはアメリカ人の子供たちと遊んだりして英語の環境に身をおくことを最優先とされる方もあり、英語を母語としない子供たちのためのクラス（ESL）をいかに早く卒業してフルで現地校の授業に出席できるようになるかを、子供よりも親同士が競っているようなところもあった。そんな中、ESLを早々に終えて周りから羨望のまなざしで見られていた子が補習校の休み時間に「ぼく補習校が好き。だっておなかが痛くならないもん」

と言っているのを聞き、こんな小さな子供たちもプレッシャーを抱えて必死でアメリカの子供たちや勉強についていこうとしているんだなあ、なんとも意地らしく思えたものである。また、どちらの言葉も中途半端になってしまう「ハーフリンガル」にならないよう、母国語できちんと考えられる力をつけられるようにと、高等部の生徒とは夜まで一緒に社説を読んだりしたのも良い思い出である。余談ではあるが、2006～12年にカザフスタンに駐在していた際、当時の教え子が商社の研修員としてやってきて偶然の再会を果たした。

日系企業での勤務 [1994～1999]

補習校の仕事をしながら地元のカレッジで学んだり、カレッジの International Students Office でアルバイトをしたりしていた時に、テネシー州東部では一番大きい日系企業だった日本電装（現デンソー）の現地法人からお声を掛けていただき、人事部で勤務することになった。当時アメリカは I-75 というデトロイトからフロリダまで走るハイウェイに沿ってトヨタ（ケンタッキー州）やホンダ（オハイオ州）が工場を建てたこともあり、デンソーも I-75 が通っているテネシー州の人口 3 万人足らずの街メリビルにオルタネーター、スターター、メーター、キーレスなどの電子部品工場を建て、24 時間 3 シフトでフル稼働し 2000 人余りを雇用した。デンソーは特に技能者の能力が高いことで知られ、技能オリンピックでは数々の金メダリストを輩出している。それだけに技能・技術移転は簡単にはいかず、出向者 100 人近く、出張者も常時 30 人以上いる体制だった。白人のバプティストがほとんどの小さな街にいきなりこれだけの日本人が大挙してやってきたのである。雇用拡大で歓迎ムードもある一方、世界でどんなに大きいことが起こっても地元の新聞の一面はハイスクールのフットボールチームの活躍を伝えるような小さな街に今まで見たことのない東洋人があふれることに嫌悪感を持つ人も少なくはなかったと思う。それだけに会社ではいろいろな活動を通じて地域に貢献したり、摩擦が起きないように気を配っていたと思う。

そこでのわたしの業務は地元の人と慣れないアメリカ暮らしの駐在員家族を繋ぐことが第一であった。小学校の先生との面談に付き添ったり、賃貸住宅などほとんどないところで売物件を賃貸にしてもらおうよう交渉したり。そのうち、日系企業社員のセクシャルハラスメントがアメリカで大きく取り上げられてからは、まだまだ日本では理解度の低かったセクシャルハラスメントとは何か、という講義やオリエンテーションを駐在員向けに行ったり、多岐にわたる雑多な業務をこなす毎日であった。



Public TV でのファンドレイジング番組にて

デンソーでは技能系社員の能力が極めて高いが、彼らの多くは中学・高校卒業後、企業内学園であるデンソー工業学園で学んだ人たちであった。工業学園の講師も出張者としてたびたびテネシーに来て、カイゼン活動のための QC サークルの指導なども行っており、事務方も 5S や 3M など基本的なことから、QS9000 (ISO の前身) の内部監査などの研修に参加することができた。工場内は当時のアメリカの工場としては画期的なほど 5S が守られており、見学に訪れたアメリカ人は「食品加工工場で食品が床に落ちたら食べられないけど、この工場なら食べられる」と驚いていた。また、業務の関係上、役員たちと話す機会が多かったため「工場の配置で 3 メートル余計な部分があったら何秒のロスにつながりひいてはいくらの損失になるか」ということなどを雑談の中で教えてもらったりした。また、一企業の進出が地元経済にもたらす波及効果などを目のあたりにし、もっとビジネスやビジネスによる開発など学びたいと思うようになり、9 年間住み慣れたテネシーを後にした。

MBA Enterprise Corps と中央アジア [2000 ~ 2003]

2000 年に Thunderbird School of Global Management で MBA を取得したあと、ケネディ・ジョンソン大統領時代に商務次官を務めた Jack Behrman 氏が「MBA 取得者に旧社会主義圏を中心とした途上国の実態を学んでもらいたい」との理念で始めたプログラムである MBA Enterprise Corps (MBAEC) に参加し、USAID の Enterprise Development Project が 5 か国で立ち上がろうとしていた中央アジアに派遣された。かなり大掛かりなプロジェクトであったが、ミッションは当時勢力が強かった Islamic Movement of Uzbekistan (IMU) の動きが活発化しないように、起業などを通じて特に若者などが Nothing to Lose と考えないように、またカシャガン油田があるカザフスタンにこれらの過激勢力の影響が及ばないように（「キルギスのオシュあたりまでで食い止めろ」）、なんとか経済状況をよくすることが肝要、と USAID 担当者から初日に説明があった。プロジェクトはコンサルティングやビジネスショートコース、業界団体育成など様々なコンポーネントがあったが、履歴書にデンソー時代の QS Internal Auditor と書いたところ、それを会計関係の監査と勘違いされたらしく、わたしのポジションはビジネスコースのアドバイザーと決まった。業務は各国でローカル講師候補者を探し出して TOT を実施し、20 時間ほどのコースを各地で展開することだった。わたしの担当は全 5 か国だったため、講師との面談や授業チェック、受講生との面談など、この業務を通じて 5 か国すべてを回ることができ、この時得た経験、人脈が現在の業務にも大変役に立っている。時々受講生の企業を訪問することもあったが、工場を訪れる際には「ムダのないレイアウトを提案しよう」とか張り切って出かけたものの、もともと幼稚園だったところを改装して動かせない柱がそこそこにある建物だったり、品質管理の重要性を話そうとジュース工場で、どうやって一定の品質を保っているかきいたところ「社長の舌が全て。返品があったり味がおかしい

製品は社長がいない日に出荷したもの」と言われて愕然としたりした。また、「うちの製品は一番だけど、その良さをわからない顧客が悪い」とか「クレジットとお客を持ってきてくれ。そしたらうちの会社はすべてうまくいく」と言われたり、旧ソ連圏でビジネスを始めたばかりの人のメンタリティーをこの頃しっかりと学んだ。

JICA キルギス事務所 [2004～2005]

USAID の仕事をしているときには、出会った地元の人たちに「日本人なのになんでアメリカの組織で仕事してるの？」とよく言われ、日本の一員として仕事をしたいという気持ちが芽生えてきていた。プロジェクトのフェーズが一段落したときにちょうど JICA キルギス事務所 で市場経済化という分野での企画調査員の募集があり運よく採用された。ただし、採用された際には1年したらグルジア（現ジョージア）でビジネス教育のプロジェクトが始まるのでそちらに異動して欲しいと言われており、案件形成というよりは走っていた案件の監理が主な仕事であった。その当時ちょうど「イシククリ州総合開発調査」という JICA でもそれまであまり例がないと言われていた州全体の開発調査が行われており、環境、ビジネス、コミュニティエンパワメントと様々なコンポーネントが含まれている大掛かりな調査であった。その中でパイロット事業としてハーブ栽培やジャムなど果物加工品づくりなど一村一品的なものもあれば、道の駅的に幹線道路にトイレを建設する事業もあったが、加工品に適した果物の品種選定ということや、トイレ設置場所決定の際に幹線道路沿いと言ってもどれくらいのタイミング・距離で人々がだいたい休憩を取りたいと思うのか、という視点を入れて欲しいなどといろいろと意見を述べたところ驚かれてしまい、こちらのほうがびっくりしたこともあった。また、駐在中の 2005 年には「チューリップ革命」と言われたキルギスで独立後最初の政変に遭遇した。この時は当時のアカーエフ大統領は市民に発砲したりせず無血で収束したが、大統領が国外に逃げたあとのしばしの無政府状態の際に、市民が大統領一家が所有・関係するスーパーなどに押し入り家電製品など大きいものも含めて抱えて走っていく姿を見て衝撃を受けた。

日本センター時代 [2006～2018]

キルギスでの任期が終わり、いざグルジアへと思っていたが、プロジェクト開始が遅れるなどの事情があり、カザフスタンの首都アスタナ（現ヌルスルタン）へ、日本センターの専門家としての赴任を打診された。当時、カザフスタンでは日本センターは旧首都であるアルマティのみにあったが、第2フェーズに進むにあたりカザフスタン政府からアスタナでも活動を展開すること、という条件が付けられたとのことであった。日本センターはビジネスコース、日本語コース、相互理解交流を3本柱として、東南アジア（ラオス、ベトナム、カンボジア）と旧ソ連圏（キルギス、ウズベキスタン、ウクライナ、カザフスタン、

モンゴル) で JICA プロジェクトとして活動を行っていた。アスタナでは CP 選定からセンター活動場所の確保など、まさにゼロからの出発であった。赴任が 2 月でマイナス 40 度の寒さを経験したこと、石油・ウラン景気におくバブル真っ最中で、日本の 100 円ショップで売っていきそうな傘が 3000 円近くもしたこと、ビールが 1 杯 1000 円もして飲む量が減ったことがよい思い出である。ビジネス関係では、他のドナーが行っている類似活動の差別化をするためにカイゼン活動や省エネ技術の普及といったテーマにも力を入れた。



カザフスタン・アルマティでのイベントで中沢会員と

結果、カザフスタン国内でもカイゼンへの理解が深まり、2010年に制定された「Productivity 2020」という国家プログラムには「企業のカイゼン活動推進」といった項目が盛り込まれた。また、省エネ技術に関しては、日本の技術を売ることも念頭に置いていたが、結果国営企業から日本の企業への低ロス送電線の発注がなかった。活動の中では、EBRD など他ドナーとの連携も重視していたが、その中で出会ったの

が中沢賢治会員である。しかもアルマティで初めてお会いしたときはわからなかったのだが、あとで高校の同窓の大先輩であることを知って感激した。

カザフスタンのあとは、モンゴル日本センターへ赴任した。赴任前は「モンゴルはロシア語も通じるから大丈夫」と言われていったのだが、実際に街中ではロシア語よりも日本語の方がずっとよく通じた。スーパーの店員でも美容院でも技能実習などで日本に住んでいたという人がいてびっくりした。日本センターのスタッフも全員日本語が堪能で、毎日始業前には日本語で朝礼を行っていた。モンゴルでは日本の企業進出の相談などもよくあり、センター内でビジネスフェアなども何回か行った。特に地方の中小企業の関心が高く、一代で築いた社長が子供にあとを任せ、これからは自分の好きなことをやりたいと思う→日本で日本語が堪能な昔の日本人の面影を残したモンゴル人の若者と出会う→モンゴルと一緒にやってみる、というようなパターンが多かった。カザフにいた頃は、日本語を勉強しても現地にある大手日系企業では英語が使える人のほうが重宝され、日本語人材の受け皿がなかったが、地方の中小企業が進出するようになれば、日本語人材へのニーズは高くなるということを学んだ。モンゴルではまた男女の役割がはっきりしていることにも興味を持った。モンゴルは女性の方が男性より大学進学率が高いという珍しい国であるが、これは男は草原の中で自然と戦う術を身に着ける、女は子供を教育するために教養を身に着けていなければならない、という考えがあると聞き、なるほどと思ったものである。

JICA タジキスタン事務所 [2018 ～ 現在]

モンゴルの後、再度カザフスタンに戻り、そのあとタジキスタンに企画調査員として赴任して2年少しが過ぎた。元々の専門であるビジネス関係のプロジェクトの立ち上げの他に、農業分野も担当し、バッタ管理や農業普及活動など多くのことを勉強させてもらっている。バッタ管理案件については、第1フェーズはタジキスタン、キルギス、アフガニスタンの3か国から始まったが、これから始まる第2フェーズではそこにウズベキスタン、カザフスタンが加わる。中央アジアは国境線が入り組んでいるが、まさにバッタには国境がなく、1日150~200キロメートルも飛べる種類もある。夜は国境線のこちら側で眠って、昼はあちらに行くということが頻繁に起こるため、1か国だけの活動では効果がなく、近隣国が協力していくことが重要になってくる。プロジェクト開始当初はお互いを責め合っていた関係者たちも協調の重要性を学ぶことにより、友好的関係を築くようになっている。



中央アジアとアフガニスタンのバッタ関係者



出張で訪れたパミール高原にて

国際開発にどのように携わってきたか

日本では絶対に一緒に仕事ができないような各国の優秀な人材と働けるのが、平凡なわたしにとっては一番光栄なことだと思っています。また、「郷に入っては郷に従え」の気持ちを忘れることなく、相手の立場やバックグラウンドを理解することが大事だと考えており、そのために赴任した先で現地のことばを勉強することを心掛けています（離任するとすぐ忘れてしまうのが情けないところですが…）。

仕事上の苦勞と喜び

やはり一番の喜びは「日本の支援のおかげ」と住民のみなさんに感謝のことばをいただくことです。わたしだけがそういう言葉を聞くのがもったいなく、日本のみなさんにもぜひこの言葉を届けたい！と思います。また、日本センターでは日本語教育をやっていることもあり、子供から社会人まで様々な方が来訪されますが、日本にどんなにあこがれているか、ときらきらした目で語られると本当にうれしくなります。苦勞はあまり感じたことは

ありませんが、旧社会主義の名残りか、カウンターパート側で政府間の調整や承認まで長い時間がかかったりするときにはストレスを感じます。

私の生き方

取り立てて専門知識もないわたしが長い間この仕事に携わっていることができるのも、中央アジアに関わったからだと思っています。自分の意志で選んだわけではなく、偶然派遣された中央アジアでしたが、まさにユーラシア大陸の真ん中という東西が交わる場所における人々の多様性、また他者を他者として認めて共存していく文化が居心地よく感じられます。また、中央アジアは特に親日家が多いところですが、抑留者などの先人が日本人の勤勉さや正直さを人々の心に印象づけてくださったからだと思っています。日本人として恥じることはないよう、また住まわせてもらっていること、仕事をさせてもらっていることを周りのいろいろな人たちに感謝をして、これからも過ごしていきたいと思っています。